<研究大会報告>

第38回 研究大会報告

2019年11月17日　筑波大学東京キャンパス

●自由研究発表　第1分科会（10：00～12：00）

1番目の発表は，細田喜嗣氏（筑波大学大学院）の「現代社会の理解と問題解決を目的とする歴史学習―歴史学の方法に着目して―」である。発表者は，歴史の学びを現代社会の理解や問題解決に活用できるものであるべきだとし，歴史学習に「問いを立てること」，「史資料を読解すること」，「歴史的類推」という3つの歴史学の方法を取り入れた授業を構想した。これらの方法を取り入れた授業実践の分析と考察が示された。会場からは，授業構成・内容と問題解決との関連性などについての質問があった。

2番目の発表は，渡部康詞氏（埼玉県立狭山緑陽高等学校）の「秩父事件の研究史と論点の整理―教材化の視点を中心に―」である。本発表では研究史の論点を，①自由民権運動最後にして最高の形態と評価し，顕彰を進めていくもの，②秩父事件の中に近世以来の伝統的な側面を見出し，百姓一揆からの線上に位置づけようとするもの，③田代栄助ら指導者層の「任侠」的性格を強調するもの，④世直し一揆と比較しながら民衆の暴力の行使を「水平方向の暴力」として可視化しようとするものの4つに整理したところに特色があった。会場からは，秩父事件と世界の潮流の視点の必要性が指摘された。

3番目の発表は，竹田和夫氏（元高校教員・新潟大学非常勤講師）の「最後の歴史科目考査及び最後の『世界史B』授業で高校生から学んだこと」である。本発表では，①生徒が主体的に行う授業全面展開を通して，「大学学知」につながる授業，②授業を再現・活性化できるような考査，を目標とした実践の報告がされた。また，実践の際には，「生徒を信じ，任せること」と「待ちと励ましの姿勢に徹すること」を意識し試みたとする。こうした最後の授業・実践で学んだことから，教師・生徒がともに学ぶ高校教育と「大学学知」・学術研究の双方向的発信の重要性を提示した。会場からは，大学側からの反応に関する質問が挙がった。

4番目の発表は，金玹辰氏（北海道教育大学）の「シンガポールの前期中等地理教科書から見る地理的探究に基づく学習」である。発表者は，地理的探究に基づく学習がアジアにおいてどのように導入されているのかという問題関心のもと，シンガポールの前期中等地理シラバスとそれに基づく教科書を分析した。その結果，シンガポールでは①4つの地理的問いに沿った学習を行うこと，②地理的概念より地理的スキルと内容が重視されていること，③地理的調査の出発点として地理的問いが重視されていることが明らかになった。これらを踏まえ，よりよい地理的探究に基づく学習のための問いと概念の構造化を提言した。会場からは，シンガポールの学校制度や日本への示唆についての質問があった。

（文責　小澤祐太・友澤剛志）

●自由研究発表　第2分科会（10：00～12：00）

1番目の発表は，小室嘉奈子氏（筑波大学大学院）の「学社連携の探究授業設計におけるコーディネーターの役割―島根県雲南市の実践コミュニティを事例に―」である。地域・社会に開かれた探究的な学びの実践が求められている現状を踏まえて，地域社会と学校の連携による授業設計においてその中間支援者であるコーディネーターに着目し，実践コミュニティの構造やコーディネーターの役割を明らかにした。会場からは，実践コミュニティとは何か，一般化できるのかといった質問が挙がった。

2番目の発表は，須藤隆也氏（筑波大学大学院）の「生徒は中学校社会科公民的分野の学習の意味をどのように見出しているのか―参与観察及び生徒へのインタビュー調査を通して―」である。本報告では，参与観察や教師・生徒双方への聞き取り調査を通じて，生徒が社会科公民的分野の授業に対しどのような意味づけを行っているのか，またどのような要因が存在するのかを明らかにした。会場からは，サンプルの選定基準に関する質問や果たして社会科一般に言えるかといった指摘があった。

3番目の発表は，山本智也氏（筑波大学附属駒場中・高等学校）の「学校の中の『政治』と主権者教育―稟議制の文化に着目して―」である。学校内の予算編成や文化祭の企画など，ボトムアップでコンセンサスを形成する集団意思決定のシステムが「稟議制」に酷似している点に着目した。その上で，学校の教育活動において，生徒がどのような仕組みの中で「政治」を経験し，学校の中の「政治」を通じた学びがどのような意義を持つのか，勤務校を事例に明らかにした。会場からは，ボトムアップ型のプロセスを取っていない学校では集団意思決定のプロセスと政治の学

習とを結びつけることは困難ではないか，勤務校の中で世論をどのように形成していくのかといった質問が挙がった。

4番目の発表は，寺本誠氏（お茶の水女子大学附属中学校）の「価値判断力・意思決定力を培う中学校社会科授業の開発―法廷劇『テロ』を通して―」である。実践で見られた課題を克服するため，法廷劇「テロ」を題材とし，社会的に対立した状況を作り出した新たな実践を紹介した。価値判断・意思決定を伴う学習活動において，質の高い価値判断・意思決定をするためには社会的な見方・考え方を働かせること，提案・行動を視野に入れた学習は現代社会の様々な問題を捉える見方や考え方の基礎を養い，主体的に社会に参加する資質の育成につながることを明らかにした。会場からは，模擬裁判や法廷劇を用いる方法論と見方・考え方を働かせることとの関連，何をもって見方・考え方を働かせたと判断したのかといった質問が挙がった。

（文責　並木孝充・福田佳穂里）

●模擬授業「中世後期の『貨幣』について考える」（13：00～14：00）

模擬授業実践者は，飯田一晃・井上裕紀・近藤拓真・中村柊斗（筑波大学大学院）の4名である。本報告は授業者らが茨城県の高校で行った実践授業の報告である。本授業は，同時代に日本に流入した中国銭が朝廷の意に反する形で広く普及したことを題材にあげ，その背景について資料を読み解きながら生徒が考察する展開となっている。

電子マネーの普及や仮想通貨の誕生など，支払い手段や貨幣そのものが多様化しているという現代社会の認識のもと，生徒自身が過去の貨幣の在り方を探求することを通じて，自らの使用する貨幣の在り方を相対化することができるような日本史授業を開発した。

また，本実践の特色として中世の貨幣の在り方を多面的・多角的に追及し，生徒自らが資料を読み解きながらそれを探究する活動としてジグソー法を取り入れた点があげられよう。

授業報告後の質疑応答については以下の3点に整理することができる。1点目の指摘は，授業中における貨幣の捉え方が不十分ではないかとするものである。例えば，本実践においては貨幣を取引の場面における交換手段，価値の基準として見なす捉え方が中心的であったが，埋蔵銭，埋納銭，備蓄銭を捉えるうえでの他の観点（保存手段や儀礼的なものとしての観点）やどうしてこの時代に中国から貨幣が流入するのかといった世界史とのつながりを意識した観点が弱いのではないかという指摘である。2点目の指摘は，本実践におけるまとめが主発問の答えとして合致するのかという指摘であった。「中国銭が中世の人々に使用された背景は何か」という問いに対して，「信用が広まったから使用された」という結論が果たして適当であるのかというものである。そして3点目の指摘がジグソー法の活用に関するものであり，グループによって生じる認識の差をどのように克服し，授業後の質の保証とするのかというものであった。

これらの指摘は「短い授業時間の中で，どれだけ多面的・多角的な考察を生徒に要求することが適当であるのか」といった問いに集約されるものと思われる。1点目の指摘について，これは授業実践者が熟慮の末に行った精選の帰結となるところである。一時間で提示できる資料の数は限られており，そのために貨幣の解釈に関する観点が限定的なものになってしまった。また，これに関連して2点目の指摘についても「なぜ信用されたか」を考察する機会を一段飛ばして「信用されたから使用された」とする結論が出されたために「中国銭が中世の人々に使用された背景」の答えとしては不適当ではないかとする疑問を生んでしまったものと考察される。3点目の指摘についても，ジグソー法導入のねらいとして複数の資料を取り上げさせ，多面的・多角的な考察を促すという説明であったが，まさに上記のような問いに関わるものであるだろう。

（文責　鈴木亮祐・芹川聖頼）

●シンポジウム（14：15～16：45）

テーマ：中等社会科のこれから / これまで　―令和時代の中等社会科を考える―

今回のシンポジウムは，多様化する教員・生徒・地域・社会状況においてこれからの中等社会科はどうあるべきか，ということについて議論するものであった。シンポジストとして，石田尚子氏（大阪府教育庁），武藤正人氏（東京都立日野高等学校），森岡孝文氏（岐阜県教育委員会），山口彩実（千葉県立松戸高等学校）の4者が発表された。なお，コーディネーターを伊藤純郎氏（筑波大学），コメンテーターを中島博司氏（茨城県並木中等教育学校）が務められた。

発表では，4者がこれまで教員として社会科とどのように向き合ってきたかを自己の歩みとともに整理され，今後社会科とどのように向き合っていくかを述べられた。教員の多忙化が問題となっている今日，その中でも授業にアクティブ・ラーニングを取り入れる，研究会に参加するなど，学内外でのたゆまぬ努力が教員としての成長に欠かせないことが示された。社会科教員は，「教育者」であると同時に「研究者」でもあることが求められる。

4者による発表の後，会場から集められた質問紙から質問が紹介され，それに対し回答がなされた。山口氏は，現代社会の問題を考える上で必要な歴史をいかに精選すべきか，という質問に対して回答し，歴史的な事象と現代社会の問題とを安易に結びつけるべきではないとした上で，将来を担う生徒が，社会の様々な事象に対して自らの考えを積極的に発信できる能力を伸ばせるよう，必要な歴史を精選すべきと述べた。石田氏は，中学校での授業をどのように準備し行うべきか，という質問に，地・歴・公の全てを授業する心構え，小学校からの変化に戸惑う生徒の認知，著しい成長に伴う生徒の心情の変化に対する理解，卒業後の人生を見据えた指導の4点を挙げた。武藤氏には，学校を題材として，平和で民主的な市民の育成を行うことは可能か，という質問が寄せられた。これに対し，校則の妥当性や学校の在り方を問う等の活動を通じて，市民の育成を行うことは可能ではないか，という意見が述べられた。また，歴史の授業を行う上で意識すべき点として，現代社会への理解を挙げた。森岡氏は，教育改革や新科目の導入に対してどのように対応していくべきかという質問に対し，教育改革の方針や科目の変更がある一方，不易の事柄も存在しているとし，常に本質は何であるかを見極め，最終的な理想像を自ら探求する必要があるとした。最後に，中島氏はシンポジウムの総括として，アクティブ・ラーニングにおいて最も重要なことは何かについて言及し，授業の一方法ではなく能動的学習者を育てるという目的を持ち，楽しさや喜びのある授業を行うことであると述べた。

（文責　山根亜加利・境野圭佑）